

合同

No. 506

「全身全霊をもって神を礼拝する」

日本キリスト合同教会教師

大井 満



「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」(ローマの信徒への手紙12章1節)。

今年度、お茶の水聖書学院の春学期で「礼拝学」を担当しています。今年度からコース制を導入し、新しく「神学基礎コース」に4名、「神学実践コース」に3名、「教会音楽コース」に1名が入学されました。その中の7名と、従来からの「聖書科正科生」が3名。加えて録画で聴講される方が2名。計12名の受講生です。わたしたちが毎週、週の初めの日に当然のようにして献げている礼拝にどんな意味があるのか、わたしたちはどのようにして、どのような礼拝を献げたら良いのか、10週間にわたって学びます。

授業を開始するのとほぼ同じタイミングで、一冊の本を手に取りました。『『日常』という典礼日々の生活の中で培われる霊性』(ティッシュ・ハリソン・ウォレン著。中村佐知訳。いのちのことば社)という本です。著者はアメリカの聖公会の司祭で女性です。訳文もとても読みやすく、内容的にも教えられることの多い本です。

この本に、「私たちは、自分の身体が礼拝の場であることを、抽象的な概念としてではなく、身体を使って礼拝する実践を通して学びます」と、書かれていました。日常生活の何気ない動作の中に、著者は神を礼拝することを見るのです。朝目覚めたときの一連の動きの中に、歯を磨きながら、無くした鍵を探しながら、礼拝の中で執り行われる様々な要素を見つけ、日々の生活の中でも神を礼拝することができることに気づくようにと、著者

は語っています。

冒頭に挙げた御言葉にあるように、パウロは、ローマの教会の信徒たちに(そして当然わたしたちに)、「自分の体を・・・献げ」ることこそが、わたしたちがなすべき礼拝だと言っています。主の日(日曜日)に献げる礼拝においても、日常の中で献げる礼拝においても、「体」(「身体」)をもって礼拝するというのを、わたしたちはどの程度意識しているでしょうか。

わたしたちはまず自分の体を動かし、歩いたり、手で何かにつかまったり、安全を確認するために、目や耳を総動員して、礼拝にやってきます。席についてからも、よっこらしよと身体を持ち上げて立ち、声を出して賛美します。耳を使って聞きます。聖餐にあずかるときには、起立したり、前に進み出たりして、手を使ってパンと盃を取り、口に入れて咀嚼し、飲み込みます。こう考えてみると、わたしたちが献げている礼拝が、わたしたちの身体を献げる行為であるということがわかります。

神はわたしたちのそのような礼拝を、「聖なる生けるいけにえ」として、喜んでくださるのです。「生けるいけにえ」とあることに注意しましょう。旧約聖書のいけにえは、死んだいけにえでした。動物の血が流されなければならなかったのです。しかし、イエス・キリストがご自分の体を献げてくださったことによって、わたしたちは生きてままで神への供え物として、自分自身を献げることができるようになりました。「このいけにえはただ一度、御自身を献げることによって、成し遂げられたからです」(ヘブライ人への手紙7章27節)。

パウロはまたそのような礼拝こそ、「なすべき礼拝です」と言います。「なすべき」という言葉は聖書の原典であるギリシア語では、「理にかなう」(リーズナブルな)という意味です。わたしたちが全身全霊で神を礼拝するためには、日曜の朝10時30分に焦点を絞って、コンディションを整えて、教会にやってくる必要があります、まさにその意味でも、「日常」の生活においても神を礼拝するものでありたいと思うのです。